

こんなに食べている！遺伝子組み換え食品

目黒区消費者グループ連絡会

1996年に米国で遺伝子組み換え(GM=Genetically Modified)作物の栽培が始まって20年、世界での栽培面積は170万ha(1996年)から18,510万ha(2016年)に増加しています。日本では栽培は許されていませんが大量に輸入されており、現在、「世界で一番GM食品を食べている国」と言われているのです。

◆こんなにGM作物を輸入している日本の事情

日常、「遺伝子組み換えでない」と記載された豆腐や納豆、菓子等を選んで買っているのに、私たちが世界一食べているという実感はありません。しかし、日本は、食糧自給率(カロリーベース)が38%(2016年)と低いため、輸入に頼らざるをえず、特にGM作物4品目(トウモロコシ、大豆、ナタネ、綿実)は、GM栽培大国から相当量を輸入していると表1から推測できます。そして大量に輸入したGM作物は、姿を変えて私たちの食卓へ。大半の加工品には表示がないので、知らずに食べていることになるのです。

穀物	遺伝子組み換えの作付の割合(2014)	日本の左記の国から輸入の割合(2013)	日本の自給率(2013)	食卓に出回る割合
トウモロコシ(米国)	93%	44.8%	0.0%※	73.6%
大豆(米国)	94%	60.1%	6.0%	84.3%
ナタネ(カナダ)	95%	93.8%	0.0%	89.1%
食用綿実(豪州)	99.5%	94.6%	0.0%	94.1%

※穀物としてのトウモロコシは、自給率0.0%

(表1) 遺伝子組み換えいらないキャンペーン代表天笠啓祐氏の研修会資料より



◆遺伝子組み換え作物から作られている可能性がある主な加工品や添加物

トウモロコシ…食用油の他に、添加物、糖類、アルコール類に。

大豆…食用油や醤油など調味料、大豆製品、添加物に。

ナタネ・綿実…食用油に。そして牛・豚・鶏の飼料は、ほとんどがGM作物であり、私たちは間接的に大量に食べていることとなります。

*消費者にGM食品だと、わかる表示にしてほしい！

- 1) 表示義務の対象商品は…豆腐、納豆、味噌、コーンスナック等33品目のみ。
- 2) 油、醤油、マヨネーズ、コーンスターチ等、加工食品は、加工中に遺伝子やたんぱく質が壊され、検出されなくなるため、表示しなくてよい。
- 3) 意図しない混入の許容量…日本は5%以内であれば「遺伝子組み換えでない」と記載できる。
(EUは0.9%、オーストラリア・ニュージーランド・中国は1%、韓国は3%)

『遺伝子組み換え作物から作られている可能性がある主な加工品・添加物』

加工品・添加物	原材料	加工品・添加物	原材料	加工品・添加物	原材料
サラダ油	全4品目	トレハロース	トウモロコシ	醸造酢	トウモロコシ
植物油脂	全4品目	デキストリン	トウモロコシ	ビタミンE	大豆
しょうゆ	大豆	醸造用アルコール	トウモロコシ	キシリトール	トウモロコシ
マヨネーズ	大豆、ナタネ トウモロコシ	果糖ブドウ糖液糖 (異性化液糖)	トウモロコシ	キサントガム (増粘剤)	トウモロコシ
マーガリン	全4品目	たんぱく加水分解物	大豆	水あめ	トウモロコシ
コンスターチ	トウモロコシ	でん粉/加工でん粉	トウモロコシ	乳化剤	大豆
植物たんぱく	大豆	みりん風調味料	トウモロコシ	ブドウ糖	トウモロコシ

(表2) 遺伝子組み換え食品を避けるためのチェックシート
(遺伝子組み換え食品いらない!キャンペーン編著)より

※全4品目=トウモロコシ・大豆・ナタネ・綿実

◆遺伝子組み換え (GM) ってなあに？

生命の基本である遺伝子を人為的に操作します。自然界では起こり得ない、生物の「種の壁」を越えて遺伝子を導入させ、生命を改造する技術。

しかし、虫がかじって死ぬ作物を、人が食べて安全だと思いますか？

***GM作物には代表的な2つのタイプがあります。**
【除草剤耐性GM】主成分がグリホサートという有機リン系の強い除草剤をかけても生き残るバクテリアの遺伝子を大豆や菜種に入れ、除草剤を撒くと雑草は枯れるが、GM大豆や菜種は枯れないというもの。
【殺虫性GM】殺虫毒素を持ったBt菌の遺伝子をトウモロコシ等にいれると、すべての細胞が毒素を持つため害虫がかじるとすぐ死ぬ。殺虫剤を使わなくてすむため、経済的で手間もかかりません。

◆世界規模で拡大している子どもへの影響

ママズ・アクロス・アメリカという市民団体(米国)を立ち上げたゼン・ハニーカットさんが今年3月に来日。アレルギーと発達障害の子どもが米国で非常に増え、親たちは原因を追究。GM作物に使う除草剤(農薬)、ラウンドアップの主成分グリホサートが食料、飼料、尿、母乳、ワクチンからも検出。ワクチンには、安定剤として豚の靭帯からとったゼラチンを使用、豚の飼料にGMのものを与えているため、巡り巡ってワクチンにまで。そこで、子どもたちに、GMの食品をやめ有機の食品に替えると、2週間で農薬を100%排除でき、症状が改善したと自らの経験を話されました。

グリホサートが持つ神経毒性について、2015年3月にICRA(国際がん研究機構)が2A(発がん性の可能性が大きい物質である)に指定。日本でも3歳児の尿検査で、有機リン系農薬と合成ピレスロイド系農薬が100%、ネオニコチノイド系農薬が80%検出されているとのこと。ドイツでも、同じく3歳児の尿から100%農薬が検出され、1週間、有機作物だけの食事にしたら農薬の検出が消えたのです!

◆遺伝子組み換え食品を避けるために

日本でも20年来、GM食品反対運動が続けられてきましたが、GM作物の問題点は消費者の間に広がりません。何よりも表示制度に抜け穴が多すぎて、添加物や加工食品、外食産業、飼料など消費者の見えないところで使われているからです。消費者が選べるような表示を求める、安心できる食べ物を選ぶ、そして“GM食品を食べたくない!”の声をあげていきましょう。

※参考資料:7月10日天笠啓祐氏研修会レジュメ、「子どもに食べさせたくない遺伝子組み換え食品」芽ばえ社 他